

特55

278

本山妙心寺開山國師畧傳

全

特 55
278

W/O 22575/22



花園天皇御宸翰

往年在先師大燈國師所於此一段事

得休歇特傳持衣鉢之後報恩謝德之

思興隆佛法之志寤寐無忘而心事依

違干今未遂其願頃年病痾纏牽旦夕

難期空填溝壑者永劫之恨何事如之

仍一流再興並妙心寺造營以下事申

置仙洞之子細在之縱過一瞬必可滿

平生之志門徒之中其仁不在佗廻遠



慮可被果興隆之願故遺鳥跡述蓄懷者也

貞和三年七月廿二日 御判

關山上人禪室

我花園國師平生不蓄文字且不允紙衣錄之而其訓誥傳口碑者最多矣衡梅老人編輯之纔藏家乘自謂家醜不可向外舉也然而隱而彌露者物之定理而如賊機一則滯累後人甚焉於之乎東陽和尚有六祖傳降而有本朝高僧延寶傳燈諸傳其余諸家語類往々不尠矣家醜必不可掩埋盡也况世間有窺得國師一言一行希爲菩提資糧者是國師一流自隆盛于世之所致不露而不可隱者耶所謂物之定理自然之勢耳余不好發露父羊而今也摸抄時文漫汚辱國師全因信徒某等請而不止也亦不妨挖泥滯水大方老宿幸代國師痛賜一頓

明治廿二年初秋

誠節焚香拜識

妙心寺開山國師畧傳

遠孫比丘誠節編輯

謹て日本國京都花園妙心寺開山國師の聖跡を稽るに
 御俗姓は人皇五十六代清和天皇の後胤六孫王經基四
 世の孫滿實の四男盛光より九世に當らせ玉ひ御父を
 高梨美濃守高家と申ける世も皇家の藩鎮として忠誠
 類かく高家の孫朝秀を新田義貞と共に南朝に奉仕て
 勳功あり増々家聲を揚げられたり國師は後宇多天皇
 御宇建治三年丁丑を以て信濃國高井郡中野郷なる城
 内に誕生在りませし資性聰明穎利みて文武の道教

へらるゝと通達せずと云ふとありいとぞ又御志を
内典に留免玉ひ菩提乃道あるとを知り召し出塵の念
ひ夙に絶へさせ玉はさりき爾れと父母の愛させ玉ふ
との最深して容易に落節を允し玉えされとも其御志
を奪とも亦難う見へよける期て御齡廿一歳の時増々
浮世の墓なき榮華を厭玉ひ無上菩提の道を證得し有
情非情を濟度せんとの大願を決し玉ひ父母を辭し玉
ふことの切かりければ御父高家公は流石に勇武の英
傑なれば是を領し玉ひ又顧て母公の離別を哀玉ふこ
との切なるを國師と共に安慰つゝ、稍にして其許を稟

玉ひ遂に相模の廣嚴和尚東傳士乃所至平生の素
懐を語けつゝ出家を求玉ひたると和尚其志の堅固
にて丈夫愧ざるを深く感賞し法乃如く剃度をさせ
玉ひつゝ名を安して惠眼とぞ稱申しける國師是より
往き既に教外別傳の旨あるとを知り玉へども開闢す
るとなく或時閑林空處に趺座して若干乃香を炷き
或時は欄檻階庭に經行して幾何の思を凝し飛花落葉
水聲風唳乃間も一大事因縁を念とし寤寐食息造次に
肺乃隙も佛祖の報恩を想ひ看經禮拜常に此事を除て
え嘗て雜念なく純一に精修し玉ふ斯くて嘉曆二年御

齡五十一乃時偶も同列乃人々と海内の宗師を月旦一
玉ひけるも時しも京都紫野大徳寺に宗峰和尚やて大
活手段を具し玉ひぬる善知識の在し在すを聞き玉
ひ欣然として是我師なりと私案を著し建長宿忌乃法
會を未だ畢らぬも早や旅装の注備しつゝ行く驛亭の
次さへ意に期するも乃あきえ夜を日に繼ぎ露に濕袖
の重く石も傷跟の血さへ厭ふ玉はて直ちも大徳寺の
方丈に詣りつゝ侍者に稟して相見を請ひ玉ふに宗亭
は預て知し召ものゝ如く點頭玉も俊機と鼓動しつゝ
最と貴き問答の何々にある 國師因も宗峰相見師禮拜

乃問如何是宗門向上事峯曰關師拂袖便出峯曰作家
禪客天然有在 偕明投暗合として主客意氣相契玉へる
と畏きとにぞ侍る翌日にぬれば國師復も宗峯に請玉
むて桂塔やて永く大徳寺に止り玉はんとを申させ玉
ひけるに此世にから時の亂離も付け込み賣僧輩の輦
下も止住するも禁したれば宗峯も余儀なきとやて
紹介人のなけれを容難き由答仰せけるに國師は復答
玉ひて熟承大善知識は三世貫通の正眼を具して來客
の門限に入や一見に我等の肺肝まで見透し得らるゝ
とにて世の普通輩と等しく紹介などゝは迂遠の限な

らめと申させければ宗峯は筈爾玉ひて其請の如く桂塔を許し玉ひける是れより宗峯の會下みて大衆に混させ玉ひ日夜の參問懈なく惡辣の鉗鎚を受玉ふと庸流の堪る程の事てなかりき斯し玉ふと殆ど二年或夜大禪定の中に於て忽然雲門の關字を大悟玉ひ急よ起て丈室を叩き見解を通し玉ひたるよ宗峯手を拊て吾子は再來乃人なりとて稱賛し玉ひよきは是れ國師か曾て大德寺に來玉ふ前霄宗峯乃御夢よ雲門大師乃來り玉ふと見玉ひけるよ因てなり是時宗峯は國師よ關山乃御字を付せられ御諱の惠眼を立よ改め玉ひ且梵偈

を賦せられぬ

偈曰鎖斷路頭難透處寒雲長帶翠巒峰韶陽一字藏機

去正眼看來隔萬重是書現ニ妙心寺ノ寶庫ニ存ス是より親く宗峯の左

右よ侍し玉ひ佛祖傳來乃一大事因縁は言まてもなく

難透難解の法門とて幾種乃古則公案を參究し玉ひ其

穎敏活潑なる立藏主と申す御名乃隱なく畏こき雲の

邊よても御聞よ達するところかりよける斯て宗峯よ代

り入朝し玉ひ後醍醐天皇乃敕問よ答玉ひし 敕問不

與萬法爲侶者是什麼人國師起鞠躬却奏曰不與萬法

爲侶者是什麼人上以手中圭劃一畫曰這個學國師便

退身云云 かと出生乃僧みあらはして入内御問み
 酬るえ前代未聞乃事と稱しける又或日途次みて楠
 正成み邂逅し玉ひ心要を授け玉ひぬ 正成路次逢一
 禪者行語快活就乞心要禪者日公名如何正成日正成
 禪者日是什麼正成言下省悟招請家第殷勤受誨云即
 國師也 又或時宗峰乃御使みて嵯峨天龍寺み詣玉ひ
 ぬ同寺を將軍尊氏乃外護にて時乃住持は開山夢窓和
 尚とて眩曜宗師乃名貴かりけるか時とて上堂乃あり
 茶れは國師出て問ひ玉ふみ金翅鳥王宇宙に當る天
 龍何處みか藏れんと宣るるみ夢窓和尚は忽ち首上に

袈裟を被て須彌壇乃蔭に隠れられける國師は透さぬ
 大展三拜一玉ひ人事乃禮を行ひ玉へり斯乃機縁を
 彼乃川中島にて武田上杉兩將乃出合より快活な
 る一場乃法戦にて世に傳へて美譚とおほ所あり又紫
 野邊乃小徑に毎も蛇蝎乃出て行人を惱しけるに僧
 乃通過ノ爲めに經咒を誦すれば或は其害を免るゝと
 あり一も或時國師は宗峯に追隨し行遊玉ふに例の蛇
 蝎交を蟠屈して凄じく斯方に首角を向たるも國師は
 秘に瓦礫を拾玉ひて蛇乃頭目懸て一撃に碎破玉へは
 蛇を其任に頭挫けり宗峯是を回視して莞爾として賞

一玉ひしとぞ往昔歸宗の草を刻り大隋乃山を燒くよ
比例なきを實に無生法忍の大慈悲心よぞある借宗峰
に依持し玉ふと前後四年遂に宗峰の印證を受玉ひけ
る 法語略云、苟有人則於壁立萬仞處輕々推將去到
不回首時節直與惡辣手段全體作用不必聖胎長養專
有_レ意憂_ニ於後昆_一者也云云 是_レ我_ニ日本_ニ隆盛_{ナリ}し禪
宗乃中よても一流獨立乃真風を後乃世までも靡かせ
玉ふ基よて難有とよとある爾れは國師よえ出入頻繁
京都人士の名利榮達乃街衢に交際會遇と乃煩擾よや
堪さり玉ひけん元徳二年乃秋大徳寺を辭し玉ひ何國

と當と定めなき浮世の表を尋つ、清閑と禪心を長養
と思立玉ひ美濃國なる伊深乃奥の閑寂茅屋乃にマ
るに里民に申させ玉ひて暫時假に留玉ひける 此菴
同國加茂郡伊深村妙法山正眼寺是也又寺を距と數丁
の所よ牛牧あり是國師か田畝の業を助役玉ふ舊跡な
りと云 里民を斯く尊き善知識と申はとは勿論其御
名さへ聞きたるとのなけれは庸流のととて驅役せぬ
ころ損かりげよ耕耘の賤業より牛馬の使逐よ至るま
て我先にと争て頼參せるよ國師には曾て辭玉はず言
か隨意事よ就させ玉ひ暫時休憩間よは男女老幼よ

向はせて因果の妙理を説明し菩提の正路を導引玉ふ
 實に六祖大師の樵夫を混し石鞏禪師の獵人を交て苦
 修鍊行し玉ひしも是に優る様にも想ひ奉らざりき斯
 の如く里民の使役し奉る中にも御身には六具を離し
 玉はす二時の行鉢なし玉ひ稍にして飢餓凍餒玉はぬ
 まてみて夜み入れし時に支里民乃請ふまに〜經典
 を讀誦し玉む菴に御還ありては苔滑岩の上も終宵相
 續不斷乃正定に入り玉ふ 其岩現も存し坐禪石を稱
 し其山を關山嶺と呼り 挿形骸を土木乃如くに作し
 玉む古鏡照心在ますは往昔祖師方乃中にも多く見奉

らさる最畏き御事にて申さるも申さる難有とにそある
 建武四年延元二年宗峰乃恙あらせけるに花園法皇痛く驚
 せ玉む勸修寺經顯を以て紫野に詣らしつ宣問させ玉
 ふ其敷誑み我師宗峰の弟子乃申誰人こそ我師乃骨髓
 を得たる萬一も我師百年後又は朕尙其人を參して
 立旨を究たければ朕か爲に遺訓を申させけるに宗峰
 は謹て我太多の弟子の中専立藏主ばかりは吾道乃迦
 葉なり爾乍ら彼は物の拘束を受へき性質ならねば今
 は何れも行たると知に由なし他日廣く天下も物色し
 て彼も依止し玉へかしと宣は法皇復重て朕の花園の

離宮を喜捨して禪刹となり惠立藏主を請いて開山住持せしめん爾れは其山號と寺名を我師宗峰預是れを定てよとの厚き敕証よ宗峯深く感一玉ひ正法山妙心禪寺とを稱し定め奉られぬる抑拈華の因縁とて昔時靈山會上よて大梵天王か一枝の金波羅華を奉呈しけるよ釋尊親く是を擎玉て大衆に示し玉ふに何も鍼黙して其意を會し奉らざるに迦葉尊者ばあり是を仰視て微笑せられけるよ釋尊は正法眼藏實相無相乃法門を大迦葉よ附屬すと仰せけるとぞ是ぞ禪家に師資相承乃事よ付貴重乃公案なりと聞ぬ今宗峯乃深旨よは

法皇を大梵天王よ花園を一枝の金波羅華よ配し奉り國師を迦葉尊者に擬し自ら釋尊の正法眼藏涅槃妙心實相無相の法門を附屬し玉ふに當り玉ひし希有の値遇也と思侍りぬ是年乃冬宗峯終に入寂ましくける偕法皇は宗峯の遺訓により諸國の地頭よ普告し玉ひつゝ國師乃肖像もて搜索參らせぬれども容易に其行跡を知る便もなかりけるよ美濃國伊深の里民が奏達する所少し肖様もありければ曆應元年春甘露寺藤長を院使として伊深に差遣し玉ひけるに果して國師にて在ければ具に法皇の聖旨を傳告させけるに幾度も

辭謝ありて容易に肯せ玉ふ様もあらされけるに藤長
は并今京都にえ宗峯遷化ありて禪風將よ地よ墜んと
す特に法皇始奉り自余の信者に至るまで師の風采を
切望し止せ今よして師若邊隅に安眠せば禪宗何によ
りて傳ふへき況や宗峯の寄託師か一身に在に於てと
やと理義正しく述させければ國師にも感慨の情止み
難く遂に聖旨に服し奉られければ院使藤長の欣喜は
此上なき事とを察しらせける伊深の里民は思もよら
ぬ院使の來臨し玉ふに駭きつ其上に今まで賤き業を
助役させつゝ河の僧まを預て風聞せし宗峰の上足に

て法皇の御歸依ある一方ならぬ名僧なりと知られけ
るにそ互に集ひ謂難く賞歡鳴も止まひして里正を經
て院使の請て罪を待もあれば又國師も對し叩頭し懺
謝するもありにける而國師は院使と共に里民を安撫
つゝ旅程に上り玉ひけるよ今は訣別乃最惜れて男女
老幼乃分なく墨染乃衣袖に縋り奉りて垂誠を遺し玉
はれとて流石よ其子乃父母よ於るか如く咳來涙止免
兼糸果え聲を抗て泣叫もありよける京都には法皇乃
院使乃音信を待ち玉ふに早や國師乃至り玉ふとを聽
し召し籠顔いと麗しく直に國師も入内せしめ玉ひ

宗峰と御契約乃事ども遺ある詔命玉へは國師を既もも
聖旨を奉し京都みやこより來て拜謁はいがくせし上うへに何様とも聖命せいめいより
一任まかせ奉んと救たすふあまけるにぞ即日そのちう日にちに花園はなぞう乃の離宮りきゆうを其その
儘ままに正法山妙心禪寺しやうぼうざんぜんじととかかし大衆たいしゆうより供養くきやう乃の爲ためとて若干そと
乃の莊田ぢやうでんをさへ御寄附おんきよづけ在ある他日たうべつ特ちやくに敕ちやく黄わうを降くだし玉たまひ國こく
師しを開山かいざん第一だいいち世せいより請せうし玉たまふ其後そののち法皇ほうわうには妙心寺めうしんじの傍そば
より別べつに玉鳳院たまほういん乃の一宇いっごを創立せうりつし玉たまひ嘗つねに是こゝに潜居かづま玉たまひ
夙夕あきう參禪さんぜん辨道べんどう怠た玉たまは之これ増まく佛祖ぶつそ乃の立關たてかんを透過てうくわして無な
爲いの樂境らくかうより徜徉じやうやうし玉たまひしとぞ偕さい國師こくしは入寺にうじ開堂かいどうなし
玉たまひけるに宗峰そうほう在世せいより舊參きゆうさんと稱しょうせられし者ものを始はじめ僧そう

衆しゆう二百にひゃく余あまり員いん常じやうに左右さうぶより追隨ついでいしつゝありけるに禪苑ぜんえん乃の
行儀ぎやうぎ禮式らいしきは且かつ置おき只ただ已い墜たいの真風しんふうを興隆きやうりゆうし玉たまふを專要せんやうと
し四來しらいを接得せつとく在あるける嘗つねて垂語すいごし玉たまひて本有ほんいう圓成佛えんじやうぶつ
爲なる何迷なにま倒たう衆生しゆうじやう又また柏樹はくじゆ子こ話わ有ある賊機ぞくきと宣のたまひけるに峭拔せうはつ
峻聳しゆんそう人ひと皆みな岬さかを臨のぞみて退ひきける抑國師おさこくしは王侯わうこうの歸嚮きかう日にちより
増まして車馬しやば絡繹らくぎやくとして門前かどまへより滿みるにも關からひ殿堂てんどうの莊ぢやう
嚴室げんしつ内の裝飾かざりを必かならずし玉たまはに麻縷あさぢの方袍かうぼう枝藤えぢとうを縮ちぢめて袈け
裟さの環くわんと作あし玉たまふ尋常じんじやう室内しつないに在ある所ところは唯ただ兩朝りやうちゆう花園はなぞう天皇てんわう
の宸奎しんきのみ夫それさへ塵打ちんうち拭ぬふ空隙くわんくさへなき様さまにぞ見み受う
けられ侍はべれど伏見ふくみ天皇てんわう乃の宣旨せんしを受うて宗峰そうほう一代いちだいの語錄ごろく

を編輯し玉ふとあり殊に一篇の御遺誠は句々懇切にして文味の周到なる拜讀はる毎に戰栗の思あらしむ又文室の屋宇弊損し毎雨坐する所なけれを國師乃俗縁なる某氏之淨財を喜捨して修補せんと申しけるに國師は痛く罵り玉ひて世俗乃分として我屋宇を關せんとは思ふよらざとて重ねて來ると禁め玉ふ而て漏るとの激かりしに國師乃仰せよ器物を提け來て雨水を支持せよと宣にぞ一人乃急に笊籠を携來るに國師莞爾として賞稱し玉ひ一人乃種桶を携來るをば這顛預て宣て打出る玉ひるにそ其威風の嚴重にて機

用の憶度難き此類ひ多ありある又或時貴賓乃來玉ふに遇ひ破硯の筐底より三文錢を搜索玉ひ侍者に仰せて粉糞を買はせ自ら茶を點して饗應玉ふ等々其用意の縝密なる最と難有とにそある又或時設浴に薪木乃絶を申しけるに柵欄の板をちて焼くべいと命玉ひ又或時大衆の雨を肩して茶摘しけるに清衆を濕却へめらすめて茶樹を剪代して庫司乃中に搬ばせ玉ひし等を數百年の後七堂伽藍の輪奐として京都乃雲に聳へ數百の僧房葺を並て一派乃本山たる體面を装ひ日本至る處に其法流に滋潤ふ僧俗の數百萬に上らん

とを國師は知し召したや否や我輩凡夫乃窺知る能
はさるとにう侍る又或時純一に枯座する僧乃來を見
玉ひて汝平生禪座を專にすと實なりやと問玉へば其
僧乃左様に致す由答申により國師は重て定座せよと
命し玉ひければ其僧を壁に面て禪座せんとしけるに
國師は聲を抗玉ひ痛く罵り且連打して趁出玉ふ又一
僧の來参するを見玉ひて痛く呵責し玉ひけるを其僧
乃某特に生死事大無常迅速なるか故に已事を究明せ
んか爲來りたれば何ぞ國師乃叱咤を恐れ申んと申
しけるも國師は忽ち惡怒し玉ひ我這裡も生死無しと

て打て趁出玉ひける惟に是僧のみならず釋尊達磨の
打連て來玉ふも命根を全ふし還り玉ふべきとの覺束
なく爾りとは又逸翮の機辨なりと諸人舌を巻て震ひ
尊みける中に就き吉田隆長乃死に瀕し國師を請いて
問答隆長參宗峰頗有省處宗峰滅後復扣國師室入
奥一日病革國師往看問曰郷病重有苦惱否隆長曰我
即今入大光明三昧與和尚相見了有甚什苦惱麼國師
曰無苦惱時如何隆長喝一喝覺國師抗聲曰將謂鐘像禪
元來作家拂袖出去し玉ふとは世乃美談となりよける
而て崇光天皇觀應二年八月廿二日付乃敕宣よよれば

國師も一度は本寺を退き玉ひしを上件の敎宣もて再住し玉ふ其事故は得て詳悉すると克はは是より曩既に黃門藤房は宗峰の室を叩き頗る契悟を得て跡を山林に韜晦す國師乃妙心よ出世し玉ふや飽道の衲子と共に補佐すると數十年終に國師の印可を得たり是を第二世授翁和尚と云國師一日装束を束糸笠を頂き授翁和尚來せとて共に提挈して寺前乃風水泉に至り一蒼樹乃下よ倚立して佛と相承祖と出世乃始末を縷述し了り泊然と化し玉ふ世壽八十四歳よて時に正平十五年北延文十二月十二日なり授翁遽に大衆よ告げ昇て

丈室に入奉り留ると一日顔容冷嚴生時よ殊ならず僧俗乃來りて禮拜し永訣を衷稟し奉る者數萬人翌日法乃如く全身を金棺よ取め本山乃良隅に瘞め奉り塔を建つ是を微笑菴とぞ申しける國師に繼て住持したるそは即授翁和尚にて帝室式微の時君民亂離の間よありて寺門の興廢亦常ならず爾れど國師乃一流儼然として相承し第六代雪江和尚の下に四員の法嗣あり景川悟溪特芳東陽と云龍泉東海靈雲聖澤乃四派を出し法孫溜くとして廣く日本よ布き琉球に及ぶ其數五千余个寺とぞ聞へし道德乃溢する汎濫として遙に九天に

達し後奈良天皇は本有圓成國師乃徽號を賜り是に次
て後西院天皇は佛心覺照國師と東山天皇は大定聖應
國師と桃園天皇は光德勝妙國師と光格天皇は自性天
真國師と孝明天皇は放無量光國師と各累謚を賜ると
合て六回なり蓋大聖の世に應し生を利し玉ふや天地
の妙用究りなく四時の變幻限りなきか如く得て名貌
をべららば纔に其化儀を窺はんとすれを既に蹉過し
了れり近來空華老人あり國師を評すと痛快なり其
語を筆して本傳の結局とを以て曰

關山國師者一生涯頭壁立千仞絶不爲人假温顏遂

無鼻孔可觀破矣一時語人曰柏樹子話有賊之機亦
日慧玄這裏無生死惟此二語足見其肺肝惡辣手段
超出常倫真臨濟鉄骨之兒孫也予竊謂其真參實悟
親受大燈印記者似神光得初祖髓也柳標橫擔不顧
人直入伊深山中者似常大梅亮座主懶瓚也瑞世妙
心上漏下濕而恬不顧者似楊岐乍住屋壁疎也不構
殿堂不拘叢規不造詩偈者似無面目盧行者也門庭
高峻衲子望岷而退者似睦州雲門趙州也大機大用
電馳雷轟者似德山臨濟大慧也朴素節儉縮藤爲環
者似惟儼破菴操履也纔打得宗弼一麟滅却正法眼

藏者似風穴得首山船子得夾山也末後風水泉頭掣
風掣顛者似普化鄧隱峰行因也噫關山國師者集衆
美而大成者耶故能使雲苒繼美溢秋津洲施及海外
琉球可謂少林樹下通天犀滹沱河中燒尾鱗矣萬世
之下令人景仰不已者實爲是也 畢

版權登錄

京都花園妙心寺藏版

明治廿二年十月十日

版權御願

(定價金拾錢)

明治廿二年十月十日印刷

全 年十月廿日出版

岐阜縣美濃國武儀郡西武藝村字中洞二番地居住
當時京都市上京區仁和寺街道千本西へ入四番丁六十番戶寄留

編輯者 前田 誠 節

京都市上京區車屋町二條上ル眞如堂町十一番戶

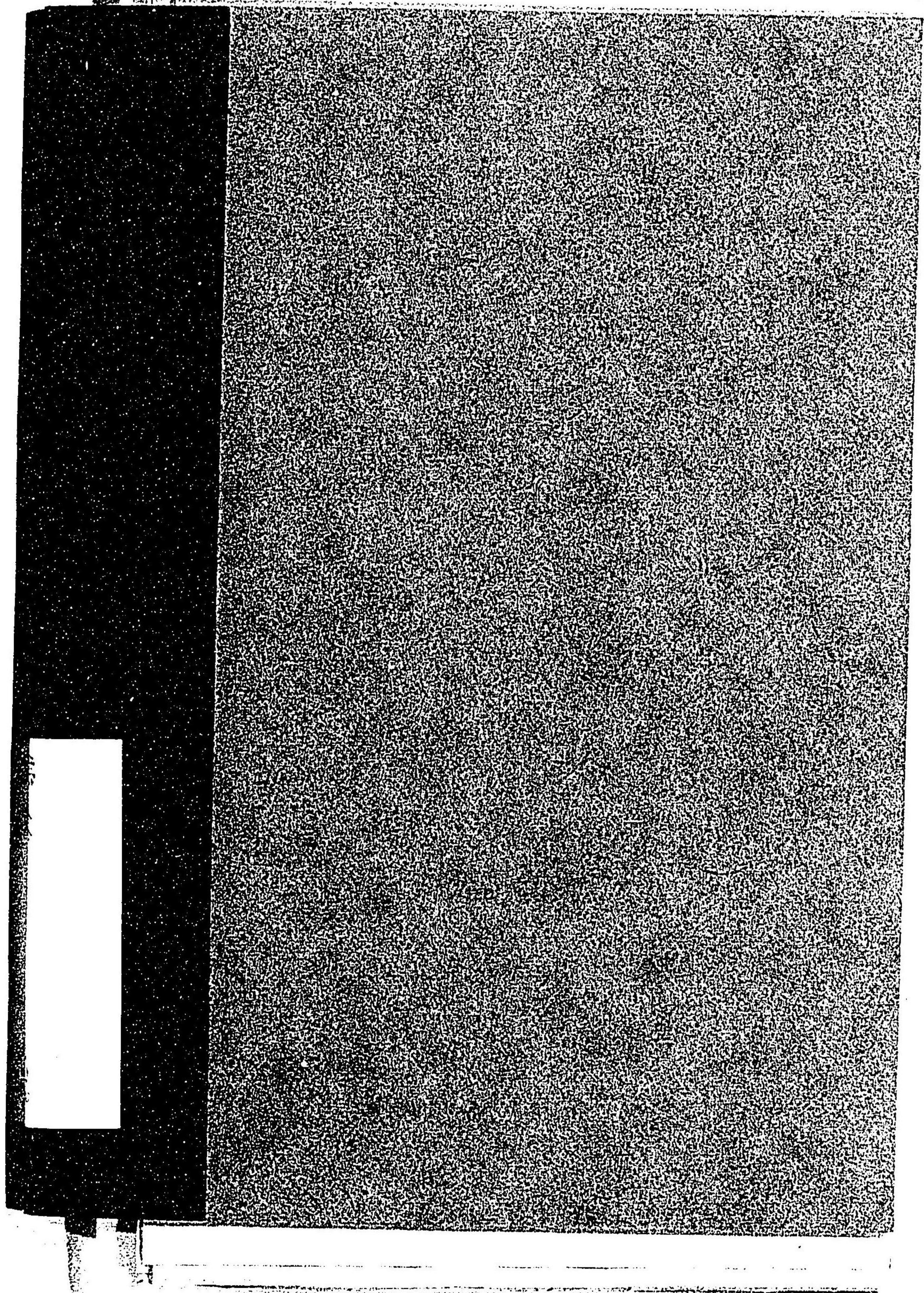
印刷者 畑 延 三 郎

全 區千本通上長者町上ル仲御堂町七番戶

發行者 小泉 德 次 郎

本山人心手與山國所身何





特55

278

本山妙心寺開山國師略伝

国立国会図書館

019843-000-1

特55-278

本山妙心寺開山國師略伝

前田 誠節/編

M22.10

ABG-0674

